
『ゆめ』

蝉時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ゆめ』

【著者名】

蝉時雨

N2372Y

【あらすじ】

悪夢もあればまた、その反対もある。

みいつけたあ . . . (前書き)

これは私
. . . ?

みいつけたあ . . .

手に握つて いるのは . . . 何だろ。う。

赤黒い液体が したた 滴る

大きくもなく小さくもない丸いもの。

まだ温かい。

いたるところから流れ出す赤黒い液体。

茶色とも黒ともいえないような細い糸のよつたもの。

沢山手に絡みつく。

「 . . . つざいな」

私はそれを赤黒く染まつた地面に叩きつける。

鈍い音がした。

あたりを見渡す。

私をおびえた目で見る人、泣きじゃくる人、逃げ惑う人

いろいろいた。

いい感じの可愛いのがいる。

ちっちやいな。

可愛いワンピースを着てウサギのぬいぐるみを持った女の子

「 . . . あ、今度はアレにしよう。」

私は女の子に向かつて歩き始める。

「だめ！だめ！逃げなきや！はやく！」

なんだこいつ。

私が狙つていたのを連れてどこに行こうとしているんだ

「 . . . 邪魔だな」

うぜえ。邪魔。

殺しちゃおつか。うん。殺しちゃえ

私はこの邪魔な女に手を伸ばした。

「くあ . . . うあ . . . か . . . はつ . . . 」

苦しそうな顔をする女。

もう少しかな？

手に力を入れた

「！？．．．あ．．．．．．．．．．．．

手が下に垂れ下がる。

「．．．もお？」

殺りがいがないな。

ダメだよダメ。ぜーんぜんダメ。
あ、私が狙つてた女の子は？
そこにヒタンツと座つていた。
今にも泣きそうな顔で。

「．．．くふつ」

やべえ。コレ欲しいわ。

私はゆつくつと手を伸ばす。

「い！嫌あああ！」

私の手を振り解き逃げる。

いいねえ。やつぱりこひじやないと

殺りがいがない

「．．．くふつ」

思わずニヤニヤしてしまつ。

私は女の子を追つて走り出す。

途中で邪魔してきたやつは上についた丸いものを
支えているところを木の枝を折るように折つて
すぐ、女の子を追つて走る。

途中で女の子がコケツと転んだ。

「．．．つーかまーえた」

手に持つたウサギのぬいぐるみで殴つてくるが

「．．．くふつくふくふ ゼーんぜん痛くなあーー

ただ殺るだけじゃあ物足りないな。

何かないかな。

ポケットに手を突つ込んで何かを探してみる。

あ、これいいじゃんかあ

「 . . . さあ、これで何をしよおかあ？」

私が取り出したのは針とナイフと短いロープ。

短いロープで手を縛つて . . .

「 . . . くふつ一回ジンタイカイボーッてやつ、

やつてみたかったんだあ」

ナイフを手にとつてその子の腹部にナイフの先端を押しつけ

. . . 開く。

その間にも女の子が泣き叫ぶ声が聞こえていた

「 . . . ふふんふんふふん」

気持ちいい。

この奇妙な感触 . . . つていうのか？

やつぱり皆一回は経験した方がいいって。まじでさ。

あ、外科医さんは、やつてるかもね？

手術が好きな人はいるよね、

絶対楽しくてやめられなくなるもん。

最高だ。最高すぎる。

「 . . . ふふふんふふんふん」

さらに上機嫌になる。

あ、針は何に使おうか。

とりえずいいや。

あ、これ、胃じゃね？

写メつておこう。

ポケットを探してみる。

「 . . . ひつ」

ねえや。

しゃあねえなあ。

私はさらに切り続ける。

あ、何コレこのグネグネしたやつ。

「 . . . 腸じやね？」

引っ張つてみる。ずるずる . . .

「 . . . くふつくふふふふ」

ずるずる . . .

まだまだ出でくる

やべえ楽しい。はまるわあ

いつの間にか女の子の泣き叫ぶ声は聞こえなくて

「 . . . なんだ、つまんないの . . . くふつ

私は立ち上がりつて次の獲物を探す。

「 . . . みいつけたあ 」

みいつけたあ · · · (後書き)

次の獲物は君 · · · かもね?

遊ぼお？

私は . . . 小学 3 年生？

私が卒業した小学校だ。見覚えのある風景。
教室を . . . 誰もいない教室を出る。

廊下にも

「 . . . 誰もいない。」

なぜだろう。

隣にあつた図書室。

鍵は掛かってないみたい。

「 . . . 」

中にも誰もいない。どうして？

私は奥に進んだ。新本コーナーがあつた。

「あ . . . 」

なぜかはわからないけど、私はある本に引かれた。

私は手にとつて表紙を見る。

本の題名は、>吉夢のような悪夢<
よくわかんないな。

表紙をめぐる。

「わあ . . . 可愛い絵 . . . 」

パツと見だけだつた。

「 . . . え？！」

小さくて可愛い少女が . . .

人の . . . バラバラになつた人たちの上で
踊り狂つてる絵だつた。

なぜ可愛いかと思ったのかは、

バラバラになつた人たちが真つ赤だつたので

苺か何かだと思っていたからである。

背景の色は

「あ
・
・
・
れ?
」

背景の色が変わってる？！

わざわざ赤ピンクだったのに

「え？！あ···赤？黒？」

「いい会、ござる、

「え？！？！？」
しし絵たゞ？

誰もいないはずの図書室・・・私の後ろで声がした。

振返つてみたけど誰もいない。

「え？！え？！は？！」

辺りを覗渡してみたけど、やつはひ誰もいない

「うふふふふふふ」とか

「 ああせせ 」 とか

「なあに? あの子」とか

色々聞こえてくるの

色の圖の圖書

私は懶くたって図書室を開ひ出した
「い・・・」やああああああああ

本も置いてきたかつたのだけど、

どうしてか離れない。

私は疲れて走れなくなってしまった。

足がガクガクいつてる。

恐怖のせいもあるのだらう。

だつて、

「……なん……で……あ……声が消えないの……おおおおおお……」
ずっと、ずっと、ずっと、私の後ろで声がするの……！

なんで……なんで……周りには誰もいないのよお

「くすくすすす」

「体力ないなあ、ダメだよお？？」

「きやははかあわいい」

「わつ・・・わつ・・・

「・・・やめでよお」

私が何をしたって言つの？ もつやだよ、怖こわお

私はあまりの恐怖に泣き出しちまつた。

「ああ、泣かせちやつた めはせは」

「くすくす、可愛このね」

「じおかる？」

「「「やつぱ・・・殺しちやつ？」」

え？！ やだ、やだやだやだやだ……

足！ 動け！ 足！ 足！

「きやははい、決定ーー！」

「くすり、ぱあこばー」

「仲間になつてもりこましょ、彼女可愛こいし」

「あいいねえそれ めはせはせは」

「あら？」

立て！ 走れ！

「ん～～～～～～～～！」

たつ・・・たつ・・・たつたつ・・・たたたた・・・」

走れた。けど、すぐ転んだ。

やつぱり、無理だつたか。やだな、死んじやつんだ。

「・・・あはは」

なぜだろ？ 笑がこみ上げてきて

「なあに？ 」の子、おかしくなつちやつた？

「きやはは発狂しちやつた？」

「くすくすくす・・・」

もつ、色々大事なものが飛んだのが、

どうでも良くなつていた。死？あはつ

一 あむくわ

死んだつていいじゃないか。

もう、どうだつていいじゃないか。

「……………」

立ち上かる」とが出来た。

この本から力を分けてもよろしいですか？

「ねえ、この子ホントにどうしたの？」
和は はるか
と立せ「が」た

「ぐすぐす、あんたが言つたみたいに発狂しちゃつたのかもね？」

「うふふふ、樂しかつじやない。」

私は歩きます。

私の意思はもう、なかつた。
わたし

あれと僕のこと、私が抱えり切てゐるのは長野義公尙子一?

なんで、
私は、何？

私が私を見てる?

声になつていない。
ん? ならない
・
・
?

「だつて口がないじゃない。」

私には、4人くらいの顔が見えたような気がした。

いや、見える。
わたし

中に4人、居る?入つて?

「せーかい

今から私達は死に行きまーす」

は？！

「詳しく述べと私達には体はない。」

それは、あんたもわかるてるよね？

今まででは、あんたが図書室で手に

私たちが憑いていたんだよ。

で、あんたがそれを持つちゃつたから

私達はいつでも、

て今がそれ

意味 わがへなし

シナガバノ木ノ葉

うつむかへ、单色出でる。——。——。——。

ああ。

「納得してくれた？」

誰が納得するものか。

たよね。」
「到着」とは、

卷之三

屋一頭がりがり足がりがり

ばいばい。おやすま

私は私を置いて、
飛んだ。

「わやつは――い」

楽しそうに

第1章 人物の登場

もし、私はもう運営者でない。

「氣分はどう？」

本がしゃべつてる

いや、あの4人が本に戻つて、しゃべつてるのか。

ん? 何かがおかしくない?

私はあの本になつたとき、しゃべれなかつたんだよ？

つか、前に本があるのに、なんで後ろから声がするんだ？

「さやはさ、なんたつて私たちは1万年くらいの本の井こいなんだから。」

い
・
・
・
1
万
年
？
！

「そだよ？どうやってウチらが生まれたかなんて覚えてないナゾ。それより、あん

卷之三

あるけど・・・半透明？

角川文庫

卷之三

「……せせ」

「あ
さ

「また、なくかと思つたけど・・・」

アバランチ、同ロバサウザード

「何でも、できるよ。何でも。」

「うう、今この世間には、」

「アーティストのアーティスト」

一
ひひ
・・・ありかとう

「じゃあ、遊ぼお？」

遊ぼお？（後書き）

これが、ずっと、ずっと、．．．ね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2372y/>

『ゆめ』

2011年11月6日10時09分発行